

飛鳥山 數萬歩小畑たる芝生の丘山ありて春花秋草夏涼冬雪

眺ありの勝地あり始元亨年中豊島友衛門飛鳥初と稜す神

命あり 因て飛鳥山の号あり寛永年中王子権現御造宮の時此山

上にある飛鳥祠と遷して権現の社頭鎮座をりたり其後元文

の頃 台命よりつて楯樹數千株と植させらる内ハ遊觀の便と

外ハ葛菟の為す年と致て花本林とある爾より騷人墨

客ハ句と摘章と尋ね牧童樵夫ハ秣と刈薪ととる殊よきはらま

中ハ山の頂ハ楯花燦爛として尋常の觀ハあり然野の古式ハ

甚ハ花と以て祀るといふは相合すかみの歎

秘文四年の春冷泉前大納言為久が因東下向のわくく鳴島信龜命一て此山のまじりと

る人々ハ驚くればなり

飛鳥山といふ花とて人の見せざる若木の枝の珠よきハ一さ久昔も

想ハ似れそな思えしは社よりハうけむてうりの道とされと行て是を思ひと

震の實しとてむるをりありふあり

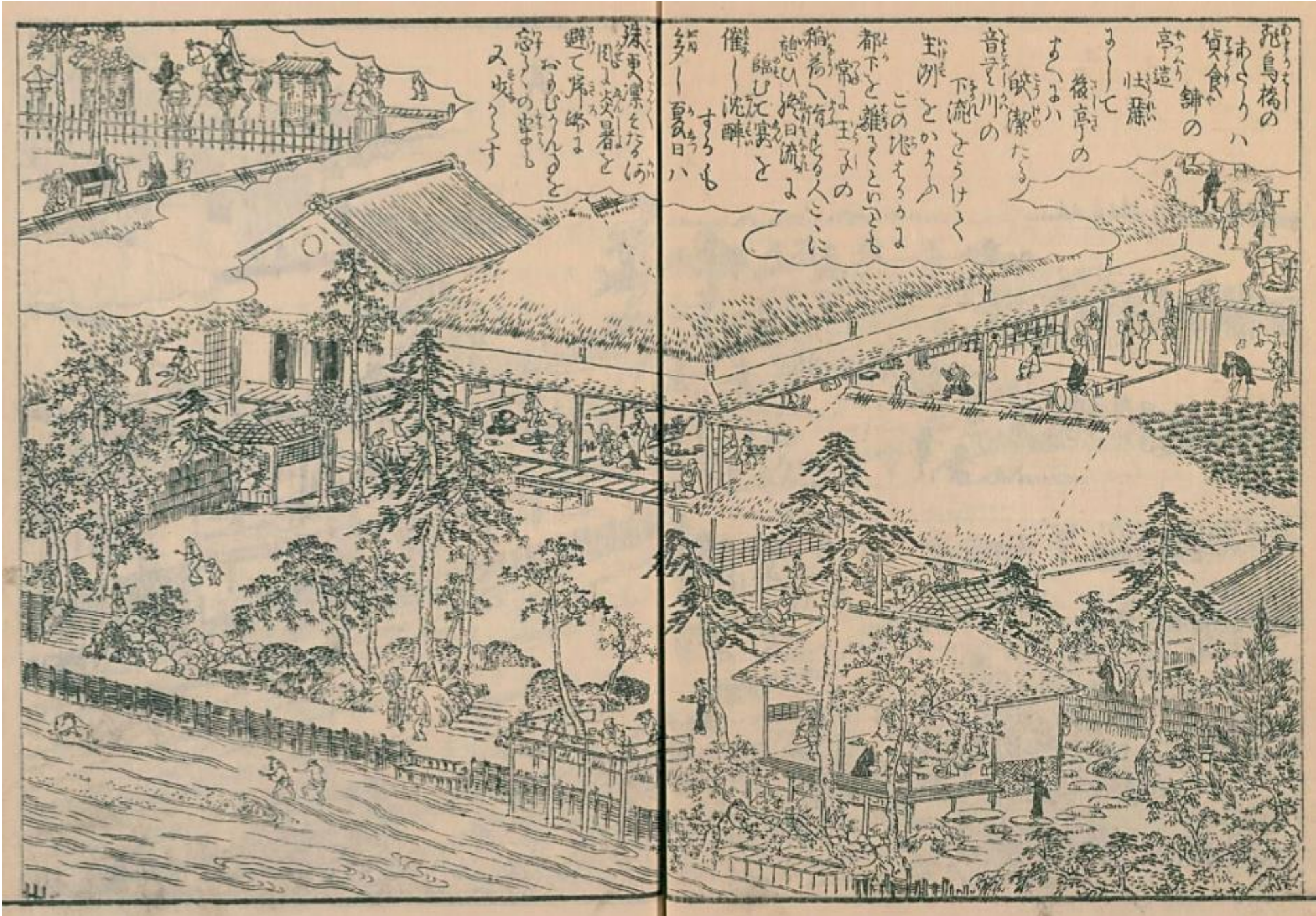
拍枝の文香とすハ飛鳥山の花の取れ甚もまじり 爲久

昔年再ハ降下向の時歩出ふ今年ハ花も侍見せなまじり

咲如ともつけぬ飛鳥の山楯こそこのまきの文やまじり 同

とあり一ハいと金輪寺ハ仰ありて一枚の花とよれせあれともたせて品川の宿ふて

降見ふいれける



飛鳥橋の
 貨食ハ
 亭造 鋪の
 後亭の
 音々川の
 下流さうけく
 都下と難うといふも
 常は王みの
 船着く有る人こに
 憩ひて日流は
 臨むて宴と
 催し沈酔
 多し夏の日ハ
 殊更漂をたのほ
 周交暑と
 避て岸端は
 心けの申す
 又少くす

世の心もあつたよりの事なれど
 事なれど心もあつたよりの事なれど
 世の心もあつたよりの事なれど
 事なれど心もあつたよりの事なれど
 世の心もあつたよりの事なれど
 事なれど心もあつたよりの事なれど
 世の心もあつたよりの事なれど
 事なれど心もあつたよりの事なれど
 世の心もあつたよりの事なれど
 事なれど心もあつたよりの事なれど
 世の心もあつたよりの事なれど
 事なれど心もあつたよりの事なれど
 世の心もあつたよりの事なれど
 事なれど心もあつたよりの事なれど
 世の心もあつたよりの事なれど
 事なれど心もあつたよりの事なれど

出典・視聽草 五集之九（国立公文書館内閣文庫所蔵）

中梁の

神田の院一柳を植もつたよりの事なれど
 柳を植もつたよりの事なれど
 神田の院一柳を植もつたよりの事なれど
 柳を植もつたよりの事なれど
 神田の院一柳を植もつたよりの事なれど
 柳を植もつたよりの事なれど
 神田の院一柳を植もつたよりの事なれど
 柳を植もつたよりの事なれど
 神田の院一柳を植もつたよりの事なれど
 柳を植もつたよりの事なれど
 神田の院一柳を植もつたよりの事なれど
 柳を植もつたよりの事なれど
 神田の院一柳を植もつたよりの事なれど
 柳を植もつたよりの事なれど
 神田の院一柳を植もつたよりの事なれど
 柳を植もつたよりの事なれど

出典・有徳院殿御実紀附録（国立公文書館内閣文庫所蔵）